

## “質の高い退院” 支援実現への取り組み

公益財団法人復康会 鷹岡病院 ○白川怜小、川村明広、渡邊謙、曾根満寿代、水野拓二

### 要旨

筆者は鷹岡病院（以下、当院）に9年勤務した後、相談支援専門員・グループホームのサービス管理責任者を兼任して3年勤務し、現在は再び病院で勤務をしている。病院と地域の両方を経験したことでの知見が広がり、地域で働く以前より退院の質が上がったと感じている。それを病院全体に広げる“質の高い退院”支援の実現に向けた取り組みについて報告を行う。本発表は、所属組織の承認を得ている。

### 1 地域を経験してからの実践

病院勤務時にも研修等に積極的に参加し福祉サービス含む制度の理解はできていたと感じていが、実際に地域に出た中で各サービスのできること・できないこと、事業所の特徴、力量、事業所事情や働き方、資源の過不足、制度の隙間で残る生活課題、相談支援体制、障害福祉担当課の考え方等地域で暮らすこと、それを支える支援者、地域性等の理解が深まった。一方、地域では病院に行く機会はあっても治療や行動制限含む療養環境を理解するほどの機会がないことを知った。

地域を経て病院に戻ったことで、これまで以上に地域生活を意識した退院支援や退院が困難と思われていた患者の退院の実現ができ、療養病棟から年間59人、内1年以上の長期入院16人、5年以上の長期入院者2名の自宅とグループホームの退院が実現できた。一方で筆者以外の担当患者も当然あり、地域支援の経験機会がない職種も多い病院という組織の中、自身の支援含め当院から退院した患者は幸せに暮らしているのかと考える機会がしばしばあった。

### 2 当院の状況と“質の高い退院”の模索

当院では2012年から高齢入院患者地域支援事業を3年間、2015年から静岡県長期入院精神障害者地域移行総合的推進体制検証事業を3年間受託する等地域移行に関するモデル事業をしており、その活動の中で多職種かつ管理監督職員・現場職員のさまざまな立場で構成するプロジェクトチームを発足し定例的に退院支援を検討する会を開いてきた。モデル事業受託終了後も元々院内にあったリハビリテーションに関する委員会と併合し、現在も定例会を継続している状況があり、地域から戻った筆者も構成員として参加した。

近年の当院は、受診する患者のメンタルヘルス及び生活の課題が多様となり、精神療養病棟入院

患者の退院は一部進んでいるという状況にあつた。その中で、当院の提供するサービスは、退院後に住み慣れた地域で安心して暮らし続けるためのものとなっているかという提言があり、“質の高い退院”について検討していくことになった。検討チームは多職種で構成され、筆者は精神保健福祉士として参加することになり、自身の感じていた疑問を検討する機会に恵まれた。

### 3 “質の高い退院”に関する調査の実施

検討チームの議論の結果、“質の高い退院”とは、退院後に住み慣れた地域で安心して暮らし続けるための支援により実現し、それは院内完結型の治療計画、看護計画、支援計画ではなく、地域社会を見据えた個別性の高い、実効性、有効性のある取り組みであることが重要であり、疾患や治療の内容のみに留まらず、患者の取り巻く環境や暮らしの連続性、関連性に目を向けることが重要であることが確認・共有され、“質の高い退院”とは何かを明らかにしていくため過去の退院者について分析していくこととなり、項目別自由記述による質問紙調査を実施するに至った。

### 4 まとめ

精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムや地域移行・定着のスキームは徐々に明確になってきているが、精神障害者の社会的復権は未だ成しえていない。法制度に定義されることにより支援の機能分化は進み、互いの実態が見えづらくなっている部分もある。“質の高い退院”支援の実現によって地域生活と転棟含む入院治療の連続性が担保され、結果的に患者の利益につながるだろう狙いもある。この取り組みが良いものとなり、将来的には拡大することで精神障害者の社会的復権が進むことを願う。今後の経過については調査結果含め継続して報告を行っていく。